

## 真田道について

参考文献『群馬県歴史の道調査報告書第十五集 歴史の道調査報告書「吾妻の諸街道」群馬県教育委員会』

戦国末から近世初頭に、信州上田の真田氏が、岩櫃城を中継基地として、本城上田と沼田を結ぶ為に設置した軍事道路であった。この道は次の四筋を中心としていたようである。

- (一) 沼田一中山一中之条一平川戸（後に原町）一 岩下一道陸神峠一川原畑一長野原一羽根尾一赤羽根（現在の三原）一大篠一信州街道と合流（この道を道陸神峠越えとする）
- (二) 沼田一中山一中之条一平川戸一岩下一高間一中室一赤岩一長野原一羽根尾一赤羽根一大篠一信州街道と合流（この道を赤岩通りとする）
- (三) 沼田一中山一中之条一平川戸一大戸一信州街道と合流（この道を大戸通りとする）
- (四) 沼田一中山一中之条一平川戸一沢渡一暮坂一小雨一長野原一羽根尾一赤羽根一大篠一信州街道と合流（この通りを暮坂越えとする）

以上四筋のうち、戦国期には（二）赤岩通りが主であったらしい（加沢記などによる）。しかし、江戸時代に入ってからは険阻なこの道は次第に使われなくなり街道と呼ぶにふさわしくなくなった。

戦国時代、群内の有力武士は、地の利を生かして天然の要害によった。岩櫃、大戸、長野原、中山、羽根尾、鎌原等あまたの古城跡は、「つわものども」の夢のあとを今に伝えている。戦国時代の道は、専ら軍事目的に供されてと言ってよく、その多くは山腹の険阻な位置に配されたようである。

天正18（1590）年小田原北条氏の滅亡により、吾妻は真田氏の領するところとなった。あまたの城は岩櫃城を残してすべて破却廢城となつた。真田氏は信州小県より吾妻及び利根を領し、領内に上田、岩櫃、沼田の三城を有し、このライン上の人馬及び物資の交流は相当の量に達したと思われる。いわゆる真田道の成立である。

## 琴橋と須川橋

参考文献『長野原町誌』上巻

長野原町は昔三原莊両橋の里といわれ、一つは須川（白砂川）に架かる須川橋、もう一つが吾妻川に架かる琴橋であった。吾妻川と須川の合流地点に架かるこの両橋は、戦国時代軍事上重要な橋であった。両方の橋が架かる川は急峻な峡谷であり、須賀尾から丸岩を通り長野原に入るには琴橋を、雁ヶ沢、川原畑、林方面から入るには須川橋を渡れなければ入れない閑門であった。

## 戦国時代の長野原町

参考文献『長野原町誌』上巻

草津、六合、長野原などは滋野源氏の望月氏系といわれる湯本氏の支配下にあつたようである。羽根尾に根拠をおいた海野氏後裔の羽尾氏、嬬恋村鎌原の鎌原氏系図や下屋文書などを参考にすると、西部吾妻の海野氏の系脈は右記のようになる。

吾妻郡西部は信濃国北信地方の土豪であった海野氏が早くに勢力を扶植していたために、鎌倉時代から南北朝期、室町とそう大きな権力の交替は無かったと思える。しかし、海野氏は一人の支配者に吾妻郡西部を任せたものではなく、自然と区域を四分してそれぞれの支配権力の均衡を保っていたようである。当時の関係文書からその四区域というは「鎌原」と「三原」と「草津」と「羽尾」と思われる。鎌原と呼ばれるのが、現在の嬬恋村西部区域、草津と呼ばれるのが現在の草津町、六合村、羽尾と呼ばれるのが長野原区域ではなかつたかと思われる。草津は当時は夏だけの温泉地であった関係で、本拠は六合村に置いていたものであったから、草津領とよばれるのは事実上現在の六合村と前口村であり、羽尾領は長野原、林、川原畑、坪井、与喜屋の各村で、応桑は鎌原或いは三原に入っていたのではあるまいか。従つて現在の長野原町の行政区域は戦国時代には草津領、鎌原領、羽尾領、三原領の各一部分が入つていたとみられる。



